排諧千里獨歩 下

中村俊定文庫
文庫 18
716
2

能諸子里獨歩下

巻面模様乃事

素綾苔述

里をと接ゑめまゐ迹を場もこのみ屋〜泡〜く分て
迹〜るもこゝを掛ゐるゝ〜百額八匂場奇仙とてし
席破急を要く初を石額表より初表のうも席
なりいたも移そうなれ〜るゝ〜二之丸表表
ゝていたり〜の紙をもゝ〜乾破く鎖陸の形を
ゝ〜ゝ急なりをゝ屋すゝ〜なる紙よりとゝ百額百
白百品ゝ立て等類の白なきゆ〜れ首屋ゝ丸表丸
欲仙とても見ゝ盗ゝす角

月花乃ゝ

一月ゝ風雅の的なりと古人も書置ゝり月は

月〜ゝ有所罪の表裏毎ゝ有花八四季ゝ有所
罪八自ゝ〜ゝ定〜ゝ〜ゝあるなれゝ鎖陸の表ゝ八二種
四季の花有所定丸て又月所〜ゝ千ゝ〜ゝ所ゝ
丸裏の月を略〜たる者ゝ〜欲仙も特ゝて
二丸二月ゝてゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ佐月八百額
初表の七句目裏の九句三三四丸表十三句目花八裏毎の十
三句目なゝりの裏七句目〜ゝ定〜ゝ有ゝ八古代連欲の席
ゝて月ゝ八風雅の〜ゝ者ゝ業ゝ歌のゝもの丸ゝ二種
百ゝ儀ゝ〜ゝ〜ゝ表八七句目表八十三句目を辞ゝ〜て
枝ゝ〜ゝ所移〜ゝ〜ゝ目〜流ゝ〜ゝ無ゝ表のゝゝとて右の定

趣向は寛なるものゝ俳諧を希まさんは花ゆゑて殺ても甚
しこの事を鎖し先は定趣ならす殺之一理なり月も花
も一所は引上てくるしの席より　俳談は古集に穀
多くして又え結え又月花の句を作りて月は月花なる事
にて案じ蕊も枝に咲節にてその案する故ある
句之多趣向多くして一句の作も古にも落ておゐ
なはの又低月花の句は先有にも落にもあるまじき
に前へ付越句終案して句作になりて月も花も
記は全連を附の吟味よく一句も新しく定すへきなりし

前句　尼に哀へき雪の衣

付　月影に具足

具足とあるを隠すしゝ見えて
尼なれど雪月の夜に具足をすれは見るに安き其趣意
定えて月影に入りし句作せしえ見新しく定めて

御すて習ひなき力いれあり　鞘

月待て旅の内裏の月　石

旅の内裏の月石ははのならさるかなれた鎧へ着て月待て
は様に入るなるへし

雑　役の鞴をおろさせ月夜きて
合の中しなる　芋をほる　月

雑役の中の芋をほるは月見て成し其仕馬出に付る

月は仮名文字書き

思ひつるもあれ帯むすび

古今集　藤　塊　幕の張まへ

こうれんなる〜ねはおもひよ塊うて帯むすび〜

幕の張は花の白紙西上人の歌の意歟

猫ものゝ　猫　雪時　ものゝ

雪紙　雪の蕾る　廿花　雪

雪人雪の蕾と　猫ものゝ　何中　蜂　雪

花ものの白紙

伝紙　月　月　雪　雪

幕しを西　夜　夜

暁年　桑の西　夜　夜

る者て花　花　白紙

右の〜月の白　月より　て月

花　白紙　月の一字　月

月　雪　雪

北より　秋　風

蕉翁の日　雪の白　我門の一條

知る〜　伝の　表七月

知恩寺氏遷宮九秋重陽祭出でしは十六夜の雲月
雲ふりて時々うの月九月ふるけきを空よりの秋の感
をもよおして萩の白露を延よりきこそ時の金釵くさまし
と青雲の方錦より月の答の恩の強よりもつくしくちり
そそ十四日月をあかしさと歌仙の秋をふる屋うまし
くも春雨の月を無意なるんと雲隠れの白波を
用ひて

八月の旅なり　詠草小幅　紙

とりの白い波中秋九月雲の世て春の見わたしは白
の一ちをあ〜いさんを為之詩する瓜の青雲の萩よ

最今の月乃面影を含せて春といよ宮れ左法
を指所所まくを歌仙よ二花二春の生涯とも
まくは尚産れ妙用とりよりを屋きなりまり

憲の句乃多

一恵は風雅の骨ありとい恵は人情の三九上深切なるもの
あれ大なり恵の句のるは左武よ御法所きこを皆文
字れらんとして根ひ事きりたとへ嫁娘作蝶影
女聖ちとなりてをもみをよりかを所屋のをとは
七情の眼よきらしとは人ぬは恵よりのをとを蓋嘉の

いるてあり。意の道をこの文言は一句のうへよりなくして
元其句意の次第は意句にまて意附へ文言よりも
かゝりて意外屋のこゝろ

就句　蹴へ玉ゝ玉ゝ玉に暖をたゝれて菓ゝ
屏風の陰より見へる菓子　重
見みやりより嫁と句をて陰へ玉ゝ玉ゝ玉に暖をたゝれて菓
玉ゝいふものゝ中に或は陰を法にてよりたるものゝ人へと
見ゝ附句意なゝ文外掛句の意と形のゝ
うい意の二重の二重別むもうへけそゝ
馬は知れ日八月て　意　する

句うへのゝ二にて二重別を意の情深ゝ見へ
ゝ意外なるゝ又一句は陰陽句にて一句にゝ
掛る意句

中庭よりふ茶屋の音ゝ玉ゝの菓て
言田のゝん白ゝ玉ゝもむゝ
見一句は陰陽句の意附句は意なゝ意句一句にて
掛屋のゝ二人屋ゝ意よりなる意ゝ形のゝ
一句陰陽句ゝ文附句意ゝ附ゝ玉ゝ
んゝ
又意五句験の変化

今茶んとい〳〵そうりに家ろう〳〵
炬燵を離出す思ひ何ますから
手紙書く〳〵意のかきつとこよ　名
煙草まき法〳〵色仕をする
敷き〳〵腰ふかくこのめてる花ゆ
世〳〵三句め五句めの特し　所要こ
ちの花は世とも嫁のいろ〳〵
見いこ〳〵乃表ゑかゝ四き
掃きこゝ解すやる室分のなする
三句の意世〳〵三句一意よなる〳〵毎〳〵なる〳〵

夜〳〵い茶ゆ人色回〳〵寺の雑
宿の甘の妙も寺妙　ゆ
解年への茶ゆ人る鳥ゆ打　雑ゆ
見色三句変化は意
意の句古式三句式五句と強く高流のそ寺三句五
句も変ゆるれと三句目の句移回言い句ゆ毎ゆ
三句に〳〵変ふ句〳〵三句め別の意茶ゆ意三句
あ〳〵と三句め使ゆ句のゆ毎ゆ　お人取ゆ大切ゆ意名
雑傷の九ゆ〳〵俳句ゆ見意ゆ毎〳〵ゆ〳〵一
句にて〳〵雑又一句ゆ雑傷句〳〵ゆ句〳〵ゆ句

侍しこと

軍体白紙のこと

一軍体の白紙軍書に有るを俳諧の働きに
むかしのこゝろを俳諧に書よ俳諧こゝろ邪しまに
有て おろかなる事なれ

八月より落紙 稽古する 武者所

芭蕉流の白紙

猿蓑のこと

芭蕉流俳諧 俳諧のこゝろ

父は軍 紙 起 卧 吉 夢

芭蕉流の白紙と軍体は白紙 蓋 多 雅 少

盗人乃白仕方のこと

一盗人の白紙 芭蕉流 紀 色 の こ 嘉 稽 の 白 紙

こゝろ

盗人のよ 化 流 ふ 妹 ゝ 分 を 活 ゝ

芭蕉流の紙 ゝ て 白 ま 白 紙

雲 ゝ 雲 盗 は 法 堪 む なり

芭蕉流 紙 朗 詠 ゝ て 行 宴 式 黄 盗 ゝ なり ゝ る

風流白紙の働 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

昼 ぬす人は 牛 ゝ 安 彩

昼の盗人紙牛を奪せる乾燥の音猶なり

津浪乃匂紙の匂

一津浪の匂を実に紙を六枚ふ白に中なれる白き風流也一なり

蘭まて津浪の匂り

世間の人のまて心ありうを通ふなれる匂きのまま

熟なり

一猫い津浪を感ず　秋出　蒙

乾津浪式感ず秋の長き風流

地震の匂

一地震の匂紙よりて必白ふ中毒あるを知る

萩そよ〳〵地震よ来れ怖ろし

乾婦人の情ふ〳〵萩そよ〳〵まて地震よ和そよ〳〵

と紙ふ雨れを風流して必白ふ

秋日和昼の地震よ中毒

乾津つ紙る秋の匂地震より日和を匂紙

ふ〳〵〳〵〳〵な式秋日和世の中毒〳〵

必白を遠ふ

雷の匂

一雷の白地なるべきこと雷は水雨を降ひ蔵てこと雷大の
ものの如きもの白地の御ものなり

雷丸蔵そこも松丸なる　まき

世そこ白地世蔵こうとそ出すれば氏流なり
四月

夕立の先よ雪　雷丸　書

是白地実なるそ姫皆の御なく神の白結しくしく
結れと夕立は雨人の知すく姫ものなしれた氏流なり
りまとと心白ものある所きこと

元食乃白丸なり

一元食の白色知なるべく姫書と高事の元食よりて中和
すきこもの多り氏流なり白地なり

梅うめ中元食の家も歌なり

是は雨子の白ひそこ雨人の赤る前氏流の姫

元食こもこもこそうき世丸もの姫

是白地氏流

三　味線　挽る　姫丸　元　食

元食の白は是筆式なるこそ氏流矢ふるもこと

白地邪正なり

一世乃お挽ふる書子知なる白地書子姫ふい人こもなる

立常を書いたるこの句も不義邪なるものなり無の人の心の
邪正の句のごとく彼て撰ばきものの心地を家集の句をと
よ撰ぶ句紙を年一部の書人撰ばるるものなりと多し

義経公の物乃具剃んと喜の日

俳句十番の内年一時蓬莱の義にて俳句自他を論
する及ばざる句の句も不義邪の句紙雅のごとくハ不
庶幾とも句のごとく連ごとく紙撰んばなる
書ちんなるごとく句の句紙を撰べきものなるんら

義経男人撰るる秋の風いかに

俳句を五紙義の句ごとく不二川の句の撰るる紙前書

俳ごとく句を撰ごとくみれ借きん菅の笠

秋ごとく撰ごとく紙の撰の句紙

見紙ごとく句ごとく紙ごとく撰の句紙

捨てみる句ごとく紙ごとく 宮る 門 妻

見ごとく句紙裏門ごとく紙ごとく撰ごとく見ごとく句の句撰

このごとく句ごとく撰ごとく紙余情大言のごとくごとく句

ごとくごとく

支離する句ごとく句ごとく紙 撰 紙

見ごとく撰句の句なれごとく句ごとく撰ごとく撰ごとく

句ごとく不義の中の義ごとく悪む所なり

此ところ家に月を書きてくる
見へ姫の元に白はく秋の夜霧を見つゝ我らすす
きて書くまことなるなるを白のくるよ春信の筆を
賛する賞いくゝ秋のこゝろい
見いと代の人物俗のるゝ式ろ半ゝ白紙
かるもの〻紙を俗より見へて帰たるゝ白紙
の新正いくゝ弁知てこゝ生すくきるゝ俗情風雅
は二日をきるすくゝ数るなれしるる筆物白のゝ
小林するゝ此可意の詞もあ紀尼法師或ハ他の世房
俗家なるゝ前者の人るゝ白紙するゝ源くゝ帰ゝ

物乃本情はるゝ

春

ハ眺るゝ白の静かなり　秋　ハ踏くゝ白の寂

春風ハ新意くゝ　秋風ハ夕意くゝ

霞　ハ朝らすくゝ白源　雪　ハ朝源くゝ夕らすし

雲の影ハ朝なり　雲の影　夕なり

木の花ハ朝咲なり　草の花　夕咲なり

海の春ハ　昼さかりくゝ　夜静く　川音ハ　昼高くゝ　夜低く

夜鶯　ハ　郭公ノ名ヲ夜鶯ト名ヲ付タル歌ノ類

暁　ハ　暁ヨリ暗ク成ル歌ノ類

雁　ハ　渡ル　夕ヲ　ナリ

花　ハ　桜　花ノ色ハ　美ナリ

花筏　ハ　志賀ノ浦ナル体ナリ

山道　ハ　山道ハ　志ノツキ法ヲ

山路　ハ　志ノ方体ナリ

鶯　ハ　鶯ヲ　志ノ

酒　ハ　餅　ハ　ひよきものなり

茶　ハ　さしく　梅　ハ　梅

楊　ハ　楊ヨリ　海棠　ハ　海棠ヨリ

柳　ハ　柳ヨリ　若葉　ハ　若葉ヨリ

美蓉　ハ　美蓉ヨリ　梨子　ハ　梨子ヨリ

菅　ハ　菅ヨリ　子　ハ　子ヨリ

蘇　ハ　蘇ヨリ　神楽　ハ　神楽ヨリ

雪　ハ　雪ヨリ　時雨　ハ　時雨ヨリ

霧　ハ　霧ヨリ　牡丹　ハ　牡丹ヨリ

杜若は ほうこんよりおれ

虫の声は 黄なるの白よりなり 西ゆくれと百よりなり なくは夜陽のさし会 うるうは夜陽のさし会

鶉は 秋ゆく小雪のれと 冬を美い春よりみる空しと

砧は 光を黄なるよりなり 西ゆくれと百よりなり 夜陽のさし会 へうは

鐘は 声とはいてを色 音とはいうまりき

袷は 夏秋より冬を重ね 裏なり

夜長は 冬より冬てはなをよ もなるへし先は冬重

蒲団は 黄色なるおれ

右の部は自然乃情なりて発白に孫ふ対世俗よりなり為 つくる程の白はて働なく古きに為へし光は白飛の音郎よりなる うなるなるれる会るへきこの白はなるう 俗言る山楽大和失

懸て飛弾信濃千ものよりそ海なきを色の白より海なるしとへ 白鳥うてゆ雨なし 山飛ゆくて海なり紀ゆ海を陸さ 世うるこ世を色をて第ゆ祭明るるきるものなるん

暑き情

古代は熱ちりめん光暑くゆるるおれて 後の 古るこ中古ゆ和系光ゆ暑熱なるまて 今ゆ云 菊流ゆ色龍熱るの為をゆるるる肉雑を 吟ふ姿は宮光暑のん

涼き情

古代は熱ひ様光涼しるなる扇るまて いるるも 古し中古は扇世紙扇ゆ金扇と遠ゆそ 涼しるるのまて古し菊流暑の色之の伸やら

なつハ涼しくも影うしかるへし

寒き情　古代ハ碑碣も寒き趣なれと古し中古
ハ竈の塗土色も寒き趣なきと今ハ古ミ
南流ハ塩鋼の姿も寒き色ニ染して寒き情の書
面ぞ見出すへし

右三体の趣ハ萬代不易の情なれハ古哉雅骨ニて趣向を見出さ
なる自然と今の新しみを得るなるへし
又寂しミとハ宗なる如く寂なる句作ニ

寂　松籟と木漏ニむかへるかしましき

宗　岩しる瀧ニむかへるか静也

寂　松茂漏　漏ニむかへるかしましき

漏の邊ニ雲一木ハ向る寂色ハ凡もさびしく又向
も薄く岩よりも漏のちょうる汝宗之松の茂りたるを
寂えと心静ニ見ん事こそ寂なりと云ふ一体之

奉納の句仕方口授

一佛神へ奉納の句ニ親疎の句あるゆゑ一ニハ心三ニハ
詞三ニ文字の字数なり親句の次第三体ヲ三ニ正親句
二ニ韻の親句三ニむの親句三節の中ニ文字の居ゑ韻なる

をいふ世俗より新旨に対して二種有り一ハ五穀を通ずる所連声
和通多字八字ゝ
朝廷諸家の称ハ人ゝ皆ゝ豆腐ゝ一つ乳のゝ如くして
世間式にて一切人倫有ゝ又新旨乃壹ハ豆腐を謎をかける
とかゝる事
無ゝ上ゝ人ゝ家中にて別式ゝ豆腐ゝ人ゝ称
乳上の白新白ハ乳白豆腐白ハ又下の新白とかゝ
称り申ゝ家乳ハ豆腐ゝ家ゝ人ゝ家ゝ本の山
乳下の新白とかゝ連歌ハ乳豆腐の別有俳諧ハ高間
ゝ

よゝ雲ゝ山家中の称ハ新より乳ハ郷ゝ豆腐ゝ注ゝ
ゝ家ゝ流ゝ中ゝ山家ゝ中ゝ称ゝ豆腐ゝ称ゝ
百月雪ゝ雪ゝ山の時ハ豆腐ゝ称ゝ
乳ハ中コウトノの頭ゝ乳ゝ五の二旨ゝ豆腐ゝ乳ゝ
乳ハ振舞ハ新て清ゝ乳ゝ豆腐ゝ乳ゝ
乳ハ高家ハ乳ハ豆腐ゝ乳ゝ世俗式諸家ゝ
なりゝ

三箇条書ゝ
乳ハ業平の十二病ハ除ゝ

頼朝公乃白のゆ

頼朝うゝぶれ軍手名取川

此句東鑑に有見られ申なり〻と雖も大ねの出陳

時にかゝりて〻さや丸額の連歌俳諧を吟ひ〻と

畠山重忠の白のゆ

畠山や松にもおもしの志の海〻ハ

見ハ曽我兄弟敵の敵を討〻ぶ波の昌ひての句

て二額の輪ふとゝふなり〻〻

多田破塚号せ色の句也

ゆうけて猪名乃せよやゝ出らゝ

見ハ長谷乃部乃師宗の発句と嘆うけてと傍の連音色

見を始ふゆゝとそ

嵐や花は敵なれ敵なれ舞

見ハ上茂名部乃ゆ作る報句〻嵐やと敵ひ舞ゆ〻の

曽我報も通音色乃部乃ゆ見ハ城中にて

先ゆハ猪名乃ゆ ふ出九ら

嵐い茶乃敵うゝなる

見代の句城集ひ通音仕ゆ〻句色〻則発せ手利城

矢ひ〻と出海上茂も滅亡せ〻と是紀色の家に侍書青

明智光秀発句のゆ

時を今天下の年月
世に信長公を謀叛の心あるとも書かれ自然山崎の合戦に
て秀吉公よりさしつかはしと

大閤唐土の句乃事

かつ〳〵あるいはやうて手傳きこつて
見つたもいのやうもやうやく通音なれとも傳のまときこ
くのさとる通音なれ共所をとゝ訪うさるを聚まを跡
すく故よ来臨なとゝ音法年も通音のとゝ共代者へ
さるあるとゝ伝つて迷ふと
かつ〳〵あるも代いはやうてきこて乃

一と出て集よへ〳〵ろう

言葉にて死活のこと

死　萍よりけ有れ死るこの形
見る所の萍よりやうをまるいは消て後ゝ死ぬこと

活　萍よりをとうつ浪乃ほるる形
右二句ともよイキの音ヲコの音も隠れと死活をこ

文字の写
天神奉納　梅　梅　書ちを御前事裏の自
伊勢神前　音の写　紅の果れ花ちをぬ色の新
日光山　心の写　ひらあう小ゝ喜葉ゝ葉の日光
姫の句ハ西歌句まて梅新し上五字の切れと七字のよの

字と字くゝ二の白い顔の紙白にて七字の字と下文
字上の字とナニヌネノ丸顔にて紙面の上の方に通
するゝ三乃白い丸顔紙白にてあゝ有り角〳〵日の光乃光面
り角〳〵大面〳〵にて白い顔にて心の白とゝふゝ

祈禱俳諧乃口変

病人快気祈なとの俳諧なとて紙の短冊に人の絵なと
白地有一〳〵又時時白地に字の文字書の言葉悔(ゆき)
発白より井三色五音お通井一くゝ

花月や天津宮戸丸御宮桜
雲晴やの(ぞき)ぞき 英祐 宗

此ゝ〳〵と森真浄くゝ書て
出ゝ〳〵発白上五七の絵ふきアカの音七字と下五字ハ
廿音紙又七七の絵ナニヌネノ乃五音井三上五七ハヨ乃音下
七五ちゝりの音ゝ
又文亀元年後柏原院御疱祈禱の連歌宗祇法師ゝ勅命
下りる時

露霜の松の緑かろゝ且この邪 宗祇
西方丸松こりを持ふ秋ゝ雪 宗砌
有明の月日海せゝ高りて新なし 宗牧

此ハ発白より井三ゝ疱瘡を祈る人間の言葉ゝ

新宅賀章の句

一新宅賀の発句或は俳諧の仕方句作法は細なる二つ物お
通せるを色紙の書式とする事なり

新婚よりと日真の日廻りのやうにひとり森の摩耶の陰又
祝殖荒果小世の小世と禁の白髭一一表のうちは雨新
吉のうちは一一句は是飛ぶこへ一貫三文字の字数を用詠上
長引去

能き家や武蔵よりこの春戸の秋

夢想の式

一夢想の句五七五にて一ありて三文字句なり大方は文字

数不足は又或は傍見より発句五のうちいつも三文字とする也の
ゝ也付は西の字の七文字の字を三文字六字は上下の加字
或は一字減しにて讀方能やうに作る肝要の俳諧
乃武は祝義新婚の意より準ずべし 脇第二句書様
通りにて 用捨の句は法出ぎりにて長し

追善俳諧の式

一追善の発句は言葉に哀傷 悲 陽 氷 雪
雪 霜の字を使ひ 水 月 星 月 雨 時雨 霧 霞 雲 風 雷 稲妻 露 霜
うゝ 雪 上 色 花 人 色 水 引 一節 席上は 俳 諧 を 飾 番

花紙俗し懐紙謡うたる書読上発句も揚句も五遍
かすへし

埋みても消ぬや烟の書へ 吉
封ひらく文乃戸口能薄ら姫

追善の句にハ烟を嫌ふといへともちらあの句ハ懸情深
く埋火にハ扉ら深の書へとまれたる嫌ふ人屋のうち深の
句も自説和尚の廷化紙志ら世申されおとらぬ情の封
切やそこらぬに懸らの烟なれバ深情をうそ嫌ふへきよ
ふるれ志の道ハ何事も句紙のうへにまゝるなる
へし

五韻乃うつり
傳音五十字

	ア行	カ行	サ行	タ行	ナ行
牙上	ア イヤ ウワ	カ キヤ クワ	サ シヤ スワ	タ チヤ ツワ	ナ ニヤ ヌワ
歯中	イ イ井 ウイ	キ キ井 クイ	シ シ井 スイ	チ チ井 ツイ	ニ ニ井 ヌイ
唇中上	ウ イユ ウワ	ク キユ クウ	ス シユ スウ	ツ チユ ウウ	ヌ ニユ ヌウ
舌下中	ヱ イエ ウヱ	ケ キエ クヱ	セ シエ スヱ	テ チエ ツヱ	子 ニエ ヌヱ
下喉	ヲ イヨ ウオ	コ キヨ キオ	ソ シヨ スオ	ト チヨ ツオ	ノ ニヨ ヌオ

ハ ヒヤ フワ　ヒ ヒ井 フイ　フ ヒユ フウ　ヘ ヒエ フエ　ホ ヒヨ フオ

マ ミヤ ムワ　ミ ミ井 ムイ　ム ミユ ムウ　メ ミエ ムエ　モ ミヨ ムオ

ヤ 井ヤ ユワ　井 井井 ユイ　ユ 井ユ ユウ　エ 井エ ユエ　ヨ 井ヨ ユオ

ラ リヤ ルワ　リ リ井 ルイ　ル リユ ルウ　レ リエ ルエ　ロ リヨ ルオ

ワ イヤ ウワ　イ イ井 ウイ　ウ イユ ウウ　エ イエ ウエ　オ イヨ ウオ

右四段を五音相通ずるなり遠声と云

アカサタナハマヤラワ此五音の陽声なり是男

声用顔と称す余四段皆女声なり合音濁声とする

アイウエオ。ワイウエオ。ヤ井ユエヨ此音唇より出る

ト。ラリルレロ。ナニヌネノ此音舌より出るサシスセソ此音歯より

出る。ハヒフヘホ。マミムメモ此音唇より出れども重し。ハヒフ

ヘホ。カキクケコ此音牙より出る

欲よ。タチツテト。ヨユエ此音歯より出る

言欲ある。知べし

二字切

花ゆ月ゆ雪ゆ神ゆ人ゆ春ゆ秋ゆ

打人を兼ねよ恨んの風をなし
夕かほや秋八いろのぬくもり

初の句八神足人といふて本体八是神足人と言葉ヲ
ゝて本体八現至ゝ二の句花ヲ恨んと言葉ヲ
花ヲ句ゝ色現至ゝ三の句夕ほやと切やうゝ
時ゝ句八ゝ句ゝ句ゝ句ゝ句ゝ句ゝ句ゝ句ゝ
ゝ句ゝ句ゝ句ゝ秋の現至ゝ二字切ゝ
とんぬへゝ

三字切乃事

花も可ん嵐やゆくゝ哀れ　庵
苔かそふゝ老ゝ吟ゝ　泳遠梅の宅
子供ゝよ熟量時ぬ広むゝん

初の句花八ゝ嵐やゆくゝ哀れと切字八ゝ
字入ゝ句ゝ花と句ゝ嵐ゝ切字八ゝ
事ゝ句ゝ嵐ゝ句ゝ風ゝ情ゝ泳遠ゝ
二の句苔ゝ老ゝ吟ゝ泳遠と切字八ゝ
梅の宅ゝ句ゝ梅ゝ句ゝ宅ゝ
泳ゝ句ゝ三の句ゝ子供ゝ熟量ゝ
も切字ゝ三字なれゝ供ゝ量ゝ

[illegible]

三段切のつゞ

花を細柳に数を附て風
眼をよせて[illegible]の時なれば
梅為業鶯の宿れる[illegible]汁

初の句は[illegible]花を細[illegible]
[illegible]
中初秋夏を吟ずと眼[illegible]
[illegible]

宿めぐる[illegible]の[illegible]汁を吟じ[illegible]
[illegible]

大迴しのつゞ

何[illegible]
雲[illegible]
何[illegible]

初の句[illegible]
の句[illegible]
切字入[illegible]

壽追しの事

壽かしきまゝに有る哉にまかせ
葉よ北の福の名ある花門　北松
来くても有つまらぬを定めかし

此句ハ冬のを事に誘て何かなくとまめてもさ定
其家と正月の飾りに松竹しといふ福松に文字
つねにいふをまゝともえ方乃い漢高成物哉
かよ音をも幸住るハすなとも

哉此次第の事

活定
哥ニいかしへの学ちたれときや白乃八宝さうる
うち丸宝ハ白し白ぬる哥　躰
白
傘に押ちがえて彩柳　評

感心
哥ニ見えおも達てまゝあるものうを中ニ面白
我のよ志るまゝとまる身も銭
白
我のさらしをも入な風の志むもの評

疎義
哥ニさうはや志をとめの跡しハあまてかし銭

むらしぐさ

白

[illegible]

嘆息

[illegible]

白

[illegible]

顧

[illegible]

白

[illegible]

當意

[illegible]

白

[illegible]

云流

[illegible]

白

[illegible]

時節

[illegible]

くる年くまれど思ひやらば

白 真言くまるゝ九百韭山の外

返す

奇に 應ぬるハて二様なましものをさ夜かはき

かくぶくまゝの身を見し 二の念

白 蓮の骨はた乳ハ義女のかほ〇ほ

此の沙義没我よの有沙外八十六年の業沙外ハ

外の口子退けりも凍をつ悉せての外ハ読書只去

さこそ気の脱し給

三世不可得

鴫立ぬ撥ミ鳥やかゝるらん

此句さしもて鴫もかくし得ゑぬる清すべき鳥也真ニ

の身も心を大へとる已子観世音菩薩を一面ニ云はる尊

たる語の意乳ある三世不一の清よにいふて

年経宇多田の子

一や義 州はいつ蓮いかく何んすど 議る 議

うきとひの急くく来て来業あるくもあらずすれくも念

そしても 〇 るかなり

替て 小舟な喉此川崖を渡むらん

いく年　来しかるこの山ぢを　踏めども
いうや　いう年　常ならぬ　嵐やさそふ　山の
右のごとく

三世のらんれいを
見ては　いかに　別れし時か　偲ばるる
現　嵐吹尾上の　花やつくらん
未　武蔵野の　草も　秋の　ちるかな

右　長谷観音　来迎堂　詠歌

推量　ちるを　ながめ
天　雲　雲　雲　雲　雲　雲　雲　雲

杉風　此　吹　を　花　も　惜　し
産　れ　ま　お　が　乳　蓮　の　ち　ん
り　三　句　の　ご　と　く　押　字　な　ち　ち

短句の　ち　孫　字

弟　の　友　此　我　我　おも　ひ　ん
阿　ち　蓮　ち　ち　ち　系　て　ち　蓮　せ　ん
花　を　見　押　ち　ち　人　ゆ　ち　ん

短句の　ち　ち　押　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
十　九　条　系　の　ち　ち

佛てこの川の石はしる〳〵字
さきてそこなる花ちるなの花の宿
此二句ともうまれをくゝ字句くゝ年の句の才識〳〵
小冬子の寄り所句殺虫のこゝ

十八字小梨のこゝ

幾秋小竹を見る年経る松の雪
砂ゝ峰ゝそこなる地ずすゝ字
是二句ともうを入れ紙入くゝ十八字くゝ字句
十六字小梨のこゝ
小かゝしの外い竹藪小竹ゝ

朝顔紙くゝ紙袋〳〵こゝ
秋の句行藪ゝ小竹ゝ
紙屋ゝ入くゝ下のくゝ紙袋くゝ字句
短句十五字小梨のこゝ
身こゝ山　間ゝ梨　ゝ句
是小者の句句ゝ小梨ゝ下（き）のこゝ
こゝ字句

短句五句句のこゝ
舟こゝ小句　風藪こゝ句芦ゝくゝ句
世くゝクスウヌフムユルの字ゝ続くゝ字くゝ余ゝ法

書よ出られ、略しぬ

短句小たつ田のつゆ

かくれ住さくさいかくれ新たく

はたくの扱ひ方をへし

短句して蔭のつゆ

秋をこそ名を草のそよ〳〵く

はつ〳〵物をこいつゝ

短句こそ蔭のつゆ

我よ志〳〵しふ人を逢ふ こそ

恋ふ 繁ハ逢ふ よ

はつ〳〵の字ハの字入〳〵小さきより強く蔭〳〵蔭のつゆ

短句はく〳〵蔭のつゆ

逢ふ今 夏ふ〳〵 雑ぬ〳〵

砌の間 ハ 鈴ハ 時 はく

引する 牛 乃 塩こ間 ふ

はつ〳〵 短を強くる 舞 ふ 方 舞 ふ

短句ハ蔭のつゆ

性 なこそ人ハよ〳〵 先

花こそ 人も 春〳〵 ハ

けてくゝ上りこそと雲くゝ間らるゝ

短句 須磨の月

五月雨の比 風雲さむく月 雲ひ比 寒さるゝ

せくゝ下もと一名の毛ぬき形ハしくゝ間るなり又すり乃

陰にくゝ黒ハ稲を刈比人の世ゝ山の長ふ比なくゝ間るゝ

比余の毛ぬき形の毛ハ連俳の詰書ハ又人伝ふ毛と略し

ぬ

雨雲毛ぬき形の毛

又かゝる雲ぬくゝ雲ぬくゝ

古今集えらひ撰る形古今

見前句の又りき雲くゝ何なりゝ雲ぬなり

見せ毛ぬき形の毛

せんかゝ毛なくゝ雲くゝ雲

瓦山ハ雲なる陰も雨 風ぬくゝ星

見し雨やくゝせんくゝ雲ぬくゝ雲の上の句附句の

下五文字を雲ぬくゝ

重言葉の毛

花すまぬ都も心有けき家のむ

句さへ宮こうしなてもやすく

是ハ前句のむのゑより遠くして都を主と詞のた

まにとくぬきてさへ此移として

ちこつの附方に季を一種添て自他のむ

たる時すと春面の移もりて複んとの附方なり

此外小も信に分数添て付なといへるあまたて是ハ

総書小別て略しぬ

花并桜附方の事

賑ひとゝし花のもとに音の音

かくさるゝ鹿る山さくら人

手綱の松の花より賑わく

山ハ此てを春よ兵ろ曲

法の毎年盗人いちれさし

桜　咲立川　坊　八日

花并桜付句のこと兵法ゑゝ近所神人ハ句

論法風土桜とし称まるかハ仙桜網桜

桜の類ひ桂なよ寄るゆのと詠まれしり称せらるる

蓮華寺の花と櫻の酒は奥州名所の内
なり　右二首の酒は四月の頃
へし

櫻は花のうち

川とも見へし　櫻　俳諧

山は皆雪の内の花さうり

櫻うり　入　おとを

江戸節も櫻の酒　櫻の

櫻は花も世とともに酒を選ぶ別酒は自然

花は芳野のうち

聖は咲うちを早下しうち見すて茶一本

工夫　茶　うみ　紙の菖

世とともに茶の酒所とみよりゆきて茶は自然

と茶代早下しうち見すて人の去

お酒のうち茶すうしかうより紙人の去

よう紙の茶の酒の酒は白よりハし

保し

芳野ニ花の事

よし野も奥ハ須かつてなく
墨なぞ是や似の世ニ花さかり

此発句ハよし野も須かつてなきいふハさ花の咲ある
時より何ゝ発句法師方の是なきを似の世の花を
其へ虚の花の説まらし事称ナり

唐花結ひの事

唐花結ひの句ハ百韻ニ一句之連歌ニてハ擬なく

花より唐ハおとろへて見るなれど俳諧ニも
花と体ニて唐ハ用ニ句続るべし
奇ふ唐花結ひ之句ハ春の季の花寄かと見る其の腹

漢和之漢の事

漢和之漢ハ和より漢句より無くて俳諧ニも連歌
之発句漢ニ和ニるる時ハ頭ニ和句四句漢六句
七句め和八句の執筆裏移り二句之漢句和句又之連漢
句四句和句又四句と聞く漢句ニ付対ニなりて頭之
発句の字ニ韻をふまて頭の句より三ふミ之あるべし

なるべし漢語より和語の対句の後世八詩の表よ
り句作かるるに有るべし俳句を漢字に有すとん
はるべ物なり余八新式なるべし武八芭蕉翁堂号
和漢の附合ゆよりて後へ

十百韻千句のうる

一十百韻八句紙略し毎日毎の句仍当時百韻毎に深
く一句毎に子句八当時も句数の定りたる也八百韻に一つ
の句のうち句おも初りて余八定に準ず資料も撰ぶべ
十百韻の発句八春秋ゆよりて三度裏表二度秋三度冬
の発句なり二度定にて十度に満ず武八初日三度
中の日四度満日三度にして三日に終せり故に武千句八
知の別なり圓の別なり小一日千句満尾
序上陽紙の次第

定

一句一直

出合遠近
但高先声

月花一句

句八句毎に知るべし発句のうち句の意を一直
に出すべし又傳あれども前句と共に他へ後るべ
き八二句五四句五六句八句武八十句余武五句
の意近よりかよりて後るべ
句八一座の人々月の句花の句八人一句で
後るべ大連小連ゆよりて決ひるべ

衆会三遍

諸禮停止

右之遍

右ハ古式之書 月日 流にてハ

一句一直

出合甚遠近

諸禮停止

是ハ一座の人数にて一句宛ハ続けて致す事
我句より三句目まて致ハ禁して三句目迄に致さす
三句目をのく続くハ輪廻よりも残りてく
是ハ大句の席なれハ清も是を詫れ時宜に随ひ
なりくハ続に時移り有之ともく定
お聴もりくきく人ハ万数し不乱にて紀をくへ
心うけ申さし

右三ヶ條ハ奥儀式也

月日

芭蕉菴
桃青

依十百韻の席にてハ百韻毎に句ひの花前に香を焼て
席上莊れしき次の巻を読て千句の席ハ満尾迄
其香絶さす次花席の飾附ハ其時の宜しに随ふへし

賦物取やうの事

一 賦物のことハ連歌にハ甚深秘のことも有れとも
俳諧にハ連歌より借用ひて無理に取ることなく
上賦取やう先規にも賦の字を句に続くよりもみ、深く

何とかの字則発句のうちの字を加上賦く下賦ハ賦のうちの字ハ
[illegible]く無者の字の紙にうつし下ハ何のうちの字を書く
[illegible]を賦何生俳諧く連歌と俳諧を渡り先上賦く佐発
句ハ檜葉竹花縁なとの字を加上賦生竹生三秋生之
縁生と成く下賦ハ賦題何俳諧く連歌と何のうちの紙
下ハ中紙下紙とハ[illegible]く発句ハ雲ハ霞ハ網なとの字の紙ハ
[illegible]と成く又一字の紙ハ二字ハ逆者ハ中
略四字ハ下略六字ハ中略一字ハ除笠冠なと成
[illegible]題ハ日を大番を数と成ハ一逆者ハ先を渡中
略ハ[illegible]を紙上下略ハ巻を抗上中下略ハ花菖蒲を網

為除篇ハ題を当流冠ハ因を雷と何ともいも無者ハ字
をとるなり

[illegible]と[illegible]会のうち

一昔の俳諧ハ今ハ俳諧も式賦の海ハ[illegible]ハ[illegible]
情の二用の[illegible]ハ中ハ人倫のうちの
雨降風吹とハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]人倫[illegible]元ハ人倫ハ二句ハ[illegible]
[illegible]ハ部[illegible]家の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

く天爾遠波のかはりハ変化の道理なれバ先其故を知べきなり

此類人倫二句続なし

天童 天女 僧 鬼 佛

此類所知と三句続なし

新院 仙洞 御門

此類人倫は天爾遠波探題のこと

主 誰 身 獨 媒

男 女 父 母

此類人倫の凡例之

虫 砧 睡 乃字 轉 寝

此類は夜分と定て天爾遠波探題のこと

右此天爾遠波の品々ハ貞徳の御傘并南の臺料なども取てさだめ
探て来ルハすべて昔より耳目の公道なれバ一敢探て一字の私なく天理の天爾遠波を導て示也と雖も猶追て悉く
知りがたし書ニあらず偏ニおかしき当流の俳諧を自ら案
情を工夫して右此天爾遠波を探るの肝要なれバ序に臨て
広く餘ニ組せて沙汰し猶へ其変化の自然なりより

世上の法と為会の程何り茶の法式は右のさうなるべく
初るべくとて

執筆仕方のすり

一席上連歌を入れひ執筆連歌より懐紙を
紙屏より原の間へ指出候間おとなるべく書て懐紙を
打（但短冊にて書紙にても奉書にても四枚を二枚ずつ二つ重ね又豊より載せ懐紙
の上より載せ）席前の座より先ずなるべく豊を先へ
衣紋を法にうひ志前にて取筆をおろし豊を引
懐紙とさゝるべし（但当ひ一二三の中を立て
現筆のあとの上へ出すべし）又豊を留て筆を

懐紙より指原発句を始へ俳発句知を所通へ
て宮道の方紙何より宗原通弼紙の書面へ長短ゆり又発句
を誦へ弼紙より発句名を書へ上へ長短紙
なるべく脇何へ能詠へ連歌と書へ何へ宗匠
ひ何へ宗匠へ下知より何へ長短の序へ取懐
紙へ右のへ長短へ長短の序へ取懐
すへ法身紙の人長句を執筆より脇
執筆又へ誦へ弼発句書へ上へ
同紙へ懐紙の序へ右のへ筆を懐
懐紙の能詠へ書へ発句の知れを誦へ書へ

吟〳〵与る〻經文名号ホの俳諧を吐る德嘉退蔵の折
又有るなる毛大右德嘉の俳諧の〻〻なるへ〻一座人数
数をもて〻〻〻〻毛茶話の次賜〻人数〻〻〻〻
嘯〻〻

下終

江戸淺草茅町二町目
須原屋伊八版